

世界を売られた女がめぐりあう、世界に売られた男。

上遠野浩平、そしてウエダハジメが浮き彫りにする、

背中合わせの戀^{こい}裏側

Illustration /
ウエダハジメ



“Jagdtiger (Porsche Laufwerk)”

上遠野浩平

●本文使用書体 /
漢字部分：A-OTF 教科書 ICA Pro R
かな部分：KR きざし M
全角約物・全角記号・半角欧文・
半角数字：A-OTF フォクミン Pro R-KL
疑問符・感嘆符：FOT・筑紫明朝 Pro R
特定約物：ヒラギノ明朝 Pro W3

『……またポルシェ式走行装置には以下のような特有の
難点がある……二種混用の足回りの衝撃が著しく、砲の
調整が狂う……走行装置のバネが固過ぎる……特殊な部
品は供給も修理も難しい……』

——G軍集団総司令部参謀長シユネイトケ少将の報告より抜粋

1.

まず彼女が言われたのは、牛と戦え、というものだった。
た。

「どりあえず、一撃で動きを止めないと襲いかかってくるからな」

シユバルツというその男は、琠^{たん}依^いに向かって淡々^{たんたん}としか口調で言った。その言い方からして、この男の方は牛と戦うことなどは大したことではないと思っ

周囲には緑が広がっていた。

平穩^{せいへん}で、のどかな牧場——空には雲が流れ、微風^{びふう}があたりを優しく揺らしている。たどえ空から見おろしてもここに何らかの異常を発見することはできないだろう。

そのすべてが単なる偽装^{はな}だった。ここは人目に触れることを憚^{はば}られることを試すための“演習場”だった。

シユバルツの横には、琠^{たん}依^いと一緒にここにやってきた久風舞^{くふうまい}惟^いが、これまた平然とした顔をして立っている。

琠^{たん}依^いは、その見た目はせいぜいが十代後半の少女にしか見えず、そして舞^{まい}惟^いの方はそれよりもさらに若く見える。ありふれた、そこら辺にいる女の子という感じだ。

だが実際には舞^{まい}惟^いの方が“年上”である。肉体年齢はさておき、記憶を有している年数で大きな差がある。琠^{たん}依^いにはまだ一年ぐらいいしか連続する記憶がないのだ。彼女の精神には歴史がほとんどない。

そして牛と戦えと命じられるのも、これが初めてである。

「——わかりました」

琉依としてはうなずくしかない。

その彼女の覇気のない様子に、む、どシユバルツが少し眉を寄せて、

「おい、行くからな」

と言うや否や、いきなり拳を彼女の顔面に叩き込んできた。

琉依は予告されたにもかかわらずそれを避けられず、まどもに喰らってしまった。よろけて、鼻血が吹き出した。

「——おいおい」

シユバルツは呆気に取られた顔をして、舞惟の方を振り向いた。

「この程度も受けられないのか？　こいつ、ほんとうに戦闘用合成人間なのか？」

「この娘の『ブリットヘッド』は完全な直接攻撃型の能力よ——間違いない。ちよっと支度に手間取るだけ。そよね？」

「——はい」

し逆らえば、横にいる二人はためらうことなく琉依を抹消するだろう。

「琉依、ためらわないようにね」

舞惟がいつもの言葉を繰り返した。

「わかりました」

琉依は鼻血をハンカチで拭き取りながら返事をした。

「よろしい——駆動装甲を展開せよ」

「装甲を展開します」

舞惟の命令を琉依が復唱すると同時に、彼女の周囲で空気が渦を巻き始めた。琉依の身体の皮膚表面が微細に振動して、共鳴現象で空気に流れを生み出しているのだ。

やがてそれは、轟々と唸る旋風となつて琉依の周辺を完全に覆ってしまった。内部の彼女の姿がかげろうのように少しブレて見える。

「——なかなか安定しないな」

シユバルツが呟いた。すると舞惟が、

「これで精一杯——駆動装甲に厚みを持たせた分、集束

琉依は顔を押しえながら答えた。血が詰まって、ぐずぐずと鼻が鳴る。

シユバルツはまだ疑い深そうに彼女を見ていたが、やがて肩をすくめた。

「まあいい——とにかくその『ブリットヘッド』どかい攻撃能力を見せてみる。鑑定はそれからだ」

彼らは、外見は普通の人間のように見えるが、実はそうではない。特別の目的のために合成された人造の存在なのだ。彼らはあるシステムに属しているのだが、それはあまりにも巨大なので、その全体を知る者はほとんどいないという——時に便宜上『統和機構』と呼ばれることもあるが、その単語は減多なことでは口にされない。

この『機構』の真の目的がなんなのか、属しているシユバルツも舞惟も、そして当然のことながら琉依も知ることはない——ただ、そのために戦えという命令が下されるだけだ。

そして今、琉依はそれを指示されているのだった。も

し切れないのよ」

と言った。シユバルツはますます渋い顔になり、

「こんなじや街の中では使えないだろう。目立つし、うるさいし、即応性も低い。野戦にしか使えそうにないな」

「一応あれでも〈特別製〉なんだけどね——少し製造予算をケチつたらしくて」

「まあいい——始めろ」

と琉依に向かって怒鳴った。

琉依は、ゆっくりとした動作で動き始めた。周囲の旋風が地面をざりざりと削っていく。彼女は自分の周囲と頭上を、ちょうど半径三メートルのかけろうのドームで覆われているような形になっているのだが、それごと動いているために、大変に鈍重だった。一歩動く度に、前後左右に反動でぐらぐらと揺れる。

百メートルほど離れた前方で、鎮で繋がれている大牛がその彼女の様子と接近を見て、興奮し始めた。

「……………」

琥依は、その凶暴な獣を見ても、ぼんやりとしたその力のない表情に変化はない。シュバルツがもう一度、舞惟の方を見て、

「本当にいいんだな？」

ど念を押した。舞惟は薄ら笑いを浮かべて、どうぞ、でも言いたげにかるく手を振った。

シュバルツは腕を上げて、手のひらを大牛の方に向けた。次の瞬間その手からは集束された衝撃波の弾丸が発射されて、大牛を束縛していた鎖を正確に狙撃し、破壊した。

大牛はその音に驚いて、身をぶるると震わせて、走り出した。

シュバルツと舞惟は後ろに下がっていき、琥依だけがその場に残される。

「……………」

彼女は、その唸り狂った猛牛を前にしても、表情に変化はない。ただ、口の中でぶつぶつと何かを呟いている。

いう重くて鈍くて、そして衝撃のある音響だった。

琥依の方には、何の変化もなかった。滑って転んで、尻餅をついている姿勢のままである。

そして牛の方は、こちらも尻餅をついていた。琥依の周囲を取り囲んでいる空気層のところで停止し、その場にへたりこんでしまっていた。

そして——その角がなくなっていた。

くるくるくる、と宙を舞っていた物体が、どすん、と地面に落ちた。それがさっきまで牛の頭に付いていた角だった。先端が欠けているだけでなく、根本からぼきりと折れていた。折れた原因は牛自らの突撃による勢いだった。

ちょうど岩の壁に向かって突進したのと同じだった。

岩はびくともせず角の方が破壊される——しかしこの場合、その相手は体重がわずかに四十キロそこそこしかない少女なのだった。

牛には、何が起こったのかまったく認識できないように、視線をふらふらと周囲にさまよわせている。角が折

「……………ためらわれない、ためらわれない、ためらわれない……………」

おまじないのように、何度も反芻している。

だが——彼女の足元がそのとき、ずるっ、と滑った。旋風によって抉り取られていた地面の土が露出し、そこに踏み出していた泥水に足を取られたのだ。

三メートル半径の、空気塊の全体が、ぐらっ、と大きく傾いた。

そして、その間も猛牛の方は突進を当然やめずに、そのまま走ってきた。

その角の先端を琥依の腹に突き立てると、首を下げ、四つ足のすべてに渾身の力を込めて、その〇・ハトンの体重を乗せて真っ向から突っ込んできた。……………そして、

——どごっ、

という異様な音が周囲に響いた。それは喻えるならば、鉄の砲丸を鉄板の上に落としたときのような、そう

れたときの衝撃が脳に達しているのかも知れない。前の右脚を痙攣させている不安定な体勢のまま牛は、変な方角に、ジグザグに走っていった。

「……………」

琥依は、よろよろと立ち上がった。彼女の位置は自ら足を滑らせたところから、一ミリもずれていなかった。

彼女はちら、と舞惟たちの方を見た。どこかすがるような目つきである。これに舞惟は冷やかに、

「まだ終わっていないわよ——砲撃、装填」
と命じた。

「はい——砲撃、装填」

琥依は、自分から離れていっている牛の方を向いた。その唇が、わななきながらかすかに開いて、そして——ぼっ、という鈍い破裂音がそこから洩れだした。

次の瞬間、牛のすぐ近くの地面が爆発するように弾けこんだ。大きく地面が抉れて、大きな土煙が上がった。

牛には直撃しなかったが——衝撃で吹き飛ばされて、全身の骨をぐしゃぐしゃに砕かれたその哀れな生物は、

一瞬で絶命していた。その巨体が大地に落ちて、バウン
ドした。

「……………」

琥依が立ちすくんでいると、舞惟はさらに冷ややかに、

「何をしている——再装填して、もう一撃よ。これは威力試験なのよ」

と言いつ放った。琥依はうなずいて、今度は慎重に狙いを定めて、そしてまた口から、ぼっ、という音を放ちつつ衝撃波を発射した。

口から直接、その一撃が放たれている訳ではなく——全身の生体波動を集束して衝撃波として発射するのがグブリットヘッド^グなのだが、その際に肺や消化器官の中で暴れ回る空気が喉から排気されるのだった。

今度は命中した。しかし牛のどこに当たったかは一瞬後にはまったく判別が付かなくなった。その巨体のほとんど全部が一瞬で木っ端微塵に砕け散って、その下の地面ごと大きく爆発したからだった。

訝しんだシュバルツの声に、琥依はやつと反応した。

手足をぎくしゃくと糸の切れた操り人形のように動かしただと思うと、その身体を覆っていた風の鎧を解放させた——と、その四方八方に飛び散っていく空気の流れに自分自身も呑まれて、くるくると独楽のように回された。

そしてがくり、と地面に座り込んでしまった。そして首をうなだれて、背中を大きく上下させている——と思っ

たら、その喉元がぐびびと蠢いて、そして、

「——うぼぼぼ、げぼぼ——」
と吐いてしまった。吐瀉物^{どしりぶつ}にしては、それはなんだか異様に赤黒く、しかも酸臭^{さんしゅう}もなく、はつきりと脂——いや、油臭い。

内臓機能が弱い合成人間専用の濃縮栄養液がそのまま吐き出されていた。全然消化されていないようだ。ストレスに対して極端に耐久性がない。

シュバルツは、もう特に驚きもせずに、ため息をついた。そして言った。

「おまえは、なんだな——まるでヤークト・ティーガー

もしも、事情を知らない者がこの光景を見ていたら、この少女は心霊的な超能力でも使ったのかと思っただろう。しかしそれは純粹に物理的な現象のみで構成された事態であり、そこにはなんら神秘的な事象は存在していないのだった。

破壊兵器の試射をして、標的の動物を殺傷した——それだけのことだった。

これら一連の様子を見て、ずっと淡い顔のままのシュバルツがまた、

「威力の調整はできないのか？」

と言った。今、琥依が地面に空けた爆撃痕^{ばくげいこん}は、どちらも巨大ではあるが、同じくらいの大きさの穴だったのを見ての質問だった。舞惟は肩をすくめて、無言でそれを肯定した。シュバルツは首をかすかに左右に振った。

「——やれやれ。おい、もういいぞ」

琥依に声を掛けた。彼女はそれが聞こえているのかいないのか、まだ全身に旋風をまどつたまま、動かない。

「——おい？」

だな。それもボルシェ式の懸架装置を履いた奴だ」

「え……」

「重装甲に大口径砲、強力な盾と矛を一緒に搭載しようとし過ぎたあまりに、安定性がまるでなく——機動性も最悪だ」

シュバルツは第二次大戦で第三帝国が敵連邦との過剰な陸戦兵器開発競争の末期に生み出した、性能表の数値だけ見ればほぼ最強だが、あまりに鈍重すぎて実戦ではまともに使い物にならなかった重駆逐戦車に彼女を喩えた。すると彼の後ろに立っていた舞惟がくすくす笑った。

「なるほど——うまいこと言うわね」

琥依には何のことだかよくわからず、茫然^{ぼうぜん}としている。

「……………」

「おい——どころで」

シュバルツはそんな彼女に、あらためて静かな口調で話しかけた。